



株式会社共栄環境 (沖縄県島尻郡南風原町)
下田 美智代 代表取締役

GUEST

廃棄物回収と業界の未来を見据えて

全国商工会連合会の中小・小規模企業成長実行本部、増山としかず本部長が全国の経営者に話を聞くコーナー。第6回は、廃棄物回収業を営みながら、古い業界の慣習から脱却した経営改善に取り組み、業界全体の向上も見据えて奮闘する下田美智代代表取締役に話を聞いた。

突然の事業承継から 試行錯誤を続けて10年

増山 下田さんは、商工会のサポートで、経営分析や事業計画の作成をしたり、小規模事業者持続化補助金を活用したりと、積極的に経営改善に取り組まれています。そもそもお父様の事業を承継されたのですよね。

下田 先代の父が創業し、現在、那覇市内を中心に事業系一般廃棄物や産業廃棄物の収集事業を行っています。私はもともと夫と那覇市内で中華料理店を営んでいましたが、夫の



増山 としかず

ますやま・としかず ● 全国商工会連合会 中小・小規模企業成長実行本部長。東京大学卒業後、昭和60年、通商産業省(現経済産業省)入省。中小企業政策や通商貿易政策など産業政策全般に取り組む。平成24年、北海道経済産業局長。平成26年、中小企業基盤整備機構筆頭理事

体調不良や経営悪化で店を閉めたのです。それを機に実家に戻り、家業の事務の手伝いを始めた矢先、父が突然の病で亡くなってしまいました。それで母やきょうだいと話合っただけで、私が事業を継ぐことになりました。平成17年のことです。

増山 当初はご苦労も多かったでしょう。失礼ながら、お父様の時代ですと、従業員管理をはじめ、大雑把な部分もあったかもしれません。

下田 増山さんのご指摘通りです。従業員は、タイムカードも押していませんでしたから。そこで、タイムカードの導入をはじめ、ミーティン

グを実施したり、規則をつくったりと、社内の見直しを始めました。しかし、小手先だけであれこれやろうとしたため、当時の従業員からは反発もあり、本当に大変でした。

増山 時間をかけて試行錯誤しながら、ここまでこられたのですね。

下田 私が継いでからの10年、条例で廃棄物の分別が厳しくなったり、価格競争が起きたり、業界の環境は大きく変わりました。そんななか、弊社では、新たに立ち上げたペットボトル事業が失敗したり、消費税の価格転嫁ができずに、経営が厳しくなったこともありました。それでも少しずつ数字がよくなっていき、今年で11年目になりますが、ようやく本当の意味でスタート地点に立てたように思っています。

まだまだわからないことも多いので、さまざまな方に協力してもらいながら、従業員が安心して長く働ける会社をつくりたいと思っています。

増山 「わからない」といえるかどうか、実は大事なことだと思いません。わかったつもりでがんばって、失敗してしまう経営者が少なくありません。もちろん人間性が重要で

が、「わからない」といえば、助けてくれる人が出てくるものですよね。

開発したシステムを 業界のために役立てたい

増山 持続化補助金を活用して顧客管理システムを導入し、「見える化」に取り組んでいますね。

下田 今や、事業系一般廃棄物回収事業は全国的にとっても有望な産業ですが、県内の業界はさまざまな面で遅れていると感じます。いまだにパソコンを使えない個人事業者も多いですし、安易な価格競争も続いています。そんななか、私は差別化を図

るため、値段だけでなく、経営の品質で弊社を選んでくれるお客様を定着させていきたいと考えています。

そのために、県内のIT会社に依頼し、廃棄物回収業向けの顧客管理システムを開発してもらいました。

増山 最高のモデルですよ。いい補助金の使われ方というのは、下田さんのようなやる気のある経営者を後押しするものですし、そして、そのお金をしっかり地域のなかで回していますからね。

それから私は、持続化補助金を活用した事業者の皆さんは、計画が国に認められた、いわば優良事業者だ

と思っています。そこで、持続化補助金の統一マークのようなものをつくって活用事業者の皆さんに配り、貼ってもらうなどすれば、その会社の信用にも貢献できると考えています。

下田 それはいいですね。統一マークではないですが、私は開発したシステムを同業他社にもセールスしてもらおうようにしました。IT会社からの希望だったので、いずれ同様のシステムが県外から入ってきて高い料金で販売されることを考えたら、沖縄の企業に適正価格で広めてもらい、業界全体のレベルアップにつなげたいと思ったからです。

増山 素晴らしいですね。本来なら行政がサポートすべきところですが、今後さらに廃棄物回収の「見える化」を進めるためには、やはり行政が補助していくべきだと思いますね。

下田 私は日本の国内できれいに完結する廃棄物処理のシステムをつくらないといけないと思っています。近年では、ゴミを資源化する技術が急速に進んでおり、ゴミが減れば、埋め立て地も、焼却する必要もなくなるので、非常に期待しています。「ゴミがなくなったら、回収事業者

は困るだろう」と思うかもしれませんが、ゴミ自体は存在します。それが資源に変わるといふことです。やがて、廃棄物回収は資源回収となり、宝物を運ぶような事業になる日が来るのは、そう遠くないと思っています。

増山 経営改善だけでなく業界の課題や将来を考えている下田さんは、今後ますますオピニオンリーダーとしても活躍されそうですね。ありがとうございました。



下田 美智代

しもだ・みちよ ● 会社勤務後、中華料理店経営を経て、平成17年に共栄環境の代表取締役役に就任。食品残渣対策などの環境問題にも積極的に取り組んでいる